



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クラスヌィヤール村とウデヘ語ビキン方言の現在
Author(s)	宮川, 琢; Miyagawa, Osamu
Citation	北方言語研究, 特別号, 159-162
Issue Date	2022-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84924
Type	other
File Information	09_Miyagawa.pdf

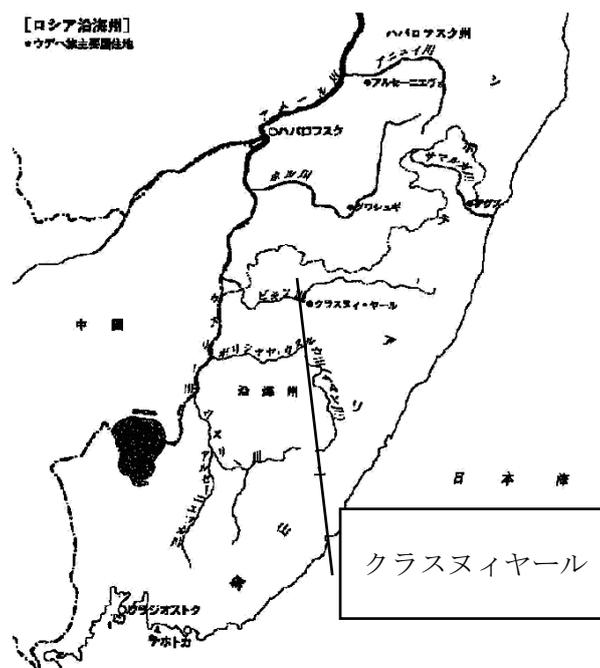


クラスヌィヤール村とウデヘ語ビキン方言の現在

宮川 琢

(ウラジオストク日本センター)

ウデヘ人はロシア連邦の沿海地方とハバロフスク地方の 2 地方（「地方：ロシアの地方行政単位（ロシア語のクライ）」）にまたがって居住している少数民族である。2010 年の国勢調査によると、ウデヘ人の人口は 1496 人、うち沿海地方には 784 人が住んでいる。故・津曲敏郎氏がウデヘ語を調査されたのは、沿海地方ポジャルスキー地区クラスヌィヤール村と言う村である。人口は 551 人、そのうちウデヘ人の人口は 378 人である。つまりウデヘ人はこの村では凡そ 70%の人口を占めているということになる。（2010 年ロシア国勢調査）



<沿海地方地図> (津曲敏郎著「ウデヘ語の手引き」2006 より抜粋)

津曲敏郎氏が現地調査を開始された 1996 年頃は、村に小型ディーゼル発電所が一基あるのみで、電気は夜のみ供給されて日中は電気が通っていなかった。しかし、2019 年 7 月にこの村に送電線が敷設され、主要グリッドと繋がり、一日中安定して電気が供給されるようになった。同年 8 月には光ファイバーケーブルによるインターネット回線が開通し、インターネットも使用出来るようになった。

一方、クラスヌィヤールまではポジャルスキー地区の行政中心地かつシベリア鉄道の駅のあるルチェゴルスクからバスが通っているが、それは週に 3 本しかない (2021 年 11 月現

在)。130 キロの距離だが未舗装道路のため、車でなら凡そ 3-4 時間、バスなら 5 時間かかる。津曲敏郎氏は「ウデへ語の手引き」(北海道大学、2006) という小冊子を日本人旅行者向けに執筆されたが、当時の旅行者はハバロフスクからバスでクラスヌィヤールよりビキン川の上流にある地点まで移動し、そこから舟でクラスヌィヤールまで下ると言う旅行ルートであった。現在ではルチェゴルスクからの車の移動も時間はかかるものの多少は整備されて、ウラジオストクからでもハバロフスクからでも行けるようになった。

ソ連時代は「国立公園」と言う考え方がなく自然保護区という概念しかなかった。しかし、ロシアになると国立公園の制度が導入され、2015 年にビキン川上流域全体が「国立公園ビキン」となり、クラスヌィヤールにはその管理事務所が開設された。元来、少数民族にはビキン川における漁業の漁獲量割当があるのだが、国立公園の開設後は自然保護の観点から少数民族か否かとは関係なく漁業が禁止され、国立公園事業の従事者のみが魚を捕ることが出来る制度に変わった。

現在、車でクラスヌィヤールに入村する時にはまずビキン川を渡る。橋を渡ると、右手に観光客用ハイキングコース「ウデへ狩人の道」が設定されている。さらに行くと、村の中心道のレーニン通りは左に反れて小川を渡る。渡って左にある 2 階建の木造の建物がウデへ民族文化センターだ。このセンターはウデへ文化の博物館であり、また文化普及の拠点、そして簡易宿泊所となっている。さらに行くと右手にクラスヌィヤールの村役場がある。そのさらに奥の山側に小学校が見えてくる。



<クラスヌィヤールの入口の標識>



<民族文化センターの建物>

小学校の建物の中には、国立公園の管理事務所、簡易宿泊所などが整備されており、入口には黒澤明監督の映画「デルス・ウザーラ」の主人公デルス・ウザーラの像が立っている。さらに奥へ行くと、新しく建設されたパン屋と日用品店がある。これらの建物の看板は、ロシア語とウデへ語が併記になっている。村の終わりの方に行くとアレクセイ・ウザさんの家で、津曲敏郎氏が泊まっておられたところだ。



<デルス・ウザーラ像>



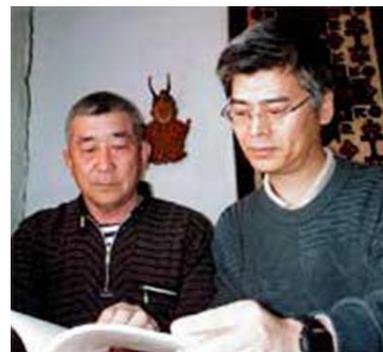
<ロシア語・ウデヘ語併記のパン屋>

クラスヌイヤールの学校は1校のみ。ここでは、最高学年の11年生まで学習することが出来る。現在の生徒数は72名。ウデヘ語は暫く正式な授業科目ではなかったが、2021年9月新学期より正式な授業科目に戻った。授業回数は週に2時限。最高学年までウデヘ語の授業を入れるかどうかの議論があったようだが、ウデヘ人が過半数のクラスヌイヤールでは最高学年までやるべきだと言う意見が強く、11年間のウデヘ語教育を導入することが決定された。しかし、現在は教科書などの教材未整備のため4年生までしか授業はない。津曲敏郎氏のインフォーマントでもおられたアレクサンドル・カンチュガさんは80歳ぐらいまでは課外授業として教壇に立って生徒たちにウデヘ語を教えていたとのこと（同氏は、2021年5月に逝去された）。現在はウデヘ人と結婚したチュコト人のガリーナ・カンチュガさん（姓は同じだが、アレクサンドル・カンチュガさんの親戚ではない）がウデヘ語の授業を担当している。

2021年7月、隣のハバロフスク地方政府主催のウデヘ語教師養成講座が2週間開催された。講座の教師はサンクトペテルブルクにあるロシア学術アカデミー会員のエレナ・ペレフヴァリスカヤ博士だ。この講座にはクラスヌイヤールから2名の受講者が参加した。



<カンチュガさん（右）と
幼少時のスアンカさん（左） >
（観光パンレット Bikin、2010）



<カンチュガさん（左）と
津曲敏郎先生（右） >
（2003年10月アットホームアカデミーURL）

一人はパーヴェル・スアンカさん（男性）（24才）、もう一人はアレクサンドラ・ウザさん

(女性) (40 才)。二人ともまだ若く、ウデヘ語の未来を引っ張っていかれるリーダーである。当然、アレクサンドル・カンチュガさんから直接ウデヘ語を習ったことがあるお弟子さんとも言える方々である。スアンカさんは現在、ウデヘ民族文化センターに勤務し、ウデヘ文化の普及に努めている。ウザさんは既に地元の学校で化学と生物担当の教師をしているが、将来はウデヘ語教師の資格を取り、ウデヘ語の教鞭を取りたいと言っている。二人の将来が楽しみである。

ウデヘ語は E. ペレフヴァリスカヤ氏の *Dialektnye razlichia kak rezultat iazykovogo sdviga (bikinskii dialekt udegeyskogo iazyka)* (論文集 *Iazykovye izmeneniia v usloviakh iazykovogo sdviga*, 2007) の分類では 8 方言にわかれ、クラスヌィヤール村の方言はビキン方言に属するが、ここで言うビキン方言とはこの分類に従い、クラスヌィヤール村とビキン川上流域のそれに限定する。若い彼らの話では、ウデヘ語ビキン方言の話者はあと 3 名ぐらいしか残っていない。カンチュガさんの妹のジナイダ・マルキナさんは現在ルチェゴルスクに住んでいる。つまり、村には 2 名ぐらいと言うことだ。また、ウデヘ語は 20 歳代だけでなく、40-50 歳代もネイティブスピーカーは存在しない。だからこそ、子供、親、祖父母の 3 世代が勉強する体制を整備して、次の世代にウデヘ語を残していきたいと、言語の保存と復活に熱い情熱を傾けておられる。

さて、私はウラジオストク市で日本の政府系組織に勤務している職員だが、沿海地方先住少数民族連盟代表 (Soiuz korenykh malochislennykh narodov Primorskogo kraia) のヴァレンチン・アンドレイツェフさん (49 歳) と昨今ウラジオストクで面談した。彼は、母親がクラスヌィヤールのすぐ西隣オロン村出身のウデヘ人である。彼からアレクサンドル・カンチュガさんが他界されたという話を聞いた時、私は彼に津曲敏郎氏とカンチュガさんが共同で執筆したとも言える「ウデヘ語の手引き」について説明した。話を交わす中で、ウデヘ人の住んでいる村々の簡単な観光ガイドと「ウデヘ語の手引き」のロシア語訳を一冊にした小冊子を出版するアイデアが生まれてきた。そして、2021 年に出版することになったことを、ここに報告致したい。また、この本が津曲敏郎氏とカンチュガさんの友情の証としていつまでも伝えられることを心から祈りたい。

最後に一つだけご提案がある。カンチュガさんの書庫だけでなく、沢山のウデヘ語話者の方々が研究者などから贈呈された村内のウデヘ語の本をこれまで学校に寄付されてきたのだが、学校が引越した折に学校の文庫が散逸してしまっている。津曲敏郎氏が録音して寄付されたジナイダさんのウデヘ語言語資料、彼女のウデヘ語授業などの録音ディスクも行方不明だと言う。ウデヘ語保存と復興を志す若い世代は本の所在がわからずに非常に苦労されている。著作権の問題など様々な問題はあると思うが、ウデヘ人の中で電子版を必要な部数だけコピー出来る形で寄付して頂くと、ウデヘ人の若い世代の言語資料として有効に活用されていくであろう。